九州における首長系譜の変動と有明首長連合

柳沢　一男
（宮崎大学教育文化学部）

はじめに

かつて私は，５・６世紀の有明海沿岸域に築造された首長墳のあいだに特異な墓制要素が共有される現象に，文化的共通性に留まらない首長層の政治的結集を想定し，それに対して「環有明海首長連合」（その後，「有明首長連合」と略している）と呼んだ（柳沢 1987）。その後，高木恭二氏による肥後製刳抜式石棺の研究に導かれて，この首長連合が西日本各地の首長や王権中枢部とのあいだに活発な交渉を行っていたことに言及した（柳沢 1995）。

しかしながら，有明首長連合と呼ぶ政治的まとまりがどのように形成され衰退していったのか，あるいは古墳時代の政治史のなかでどのような意味をもつのか，十分に整理できていなかった。ここでは，首長系譜の変動や地方ではとてつもない規模と考えられる大型墳の動向からこの課題を探りたい。そして有明首長連合諸勢力の活発な各地首長間との交渉関係を整理して，首長連合の性格を考えたい。

１．日向・大隅地方の首長系譜の変遷過程

日向・大隅は列島古墳分布の南端域にあたり，前方後円墳と円・方墳などの高塚系墓制のほかに，地下式横穴墓とよばれる特徴的な墓制が分布する。この地下式横穴墓は５・６世紀に盛行するが，その分布域のおおよそは北端が宮崎県一ツ瀬川流域，西端が川内川中流域の鹿児島県大口盆地にあって大隅と日向南半部に広がる。したがって他地域と異なる社会的まとまりを形成することは早くから指摘されている。一方，この地方では，日向に約 165，大隅に 12 の計 180 あまりの前方後円墳が分布し（九州全体の約 1/3 弱をしめる），かつ九州の大型古墳上位 10 基のうち８基までがこの地域に築造されている。列島の古墳分布南端域に多数の前方後円墳が築造され，なぜ大型墳が集中するのか，疑問は尽きない。

この地域の首長墳はほとんど前方後円墳である。それらは大河川の下流域海岸平野部に数多くの築造系列を形成している。南九州の場合，限定された墓域内での集中的造墓が顕著で，築造系列（首長系譜）の認定が比較的容易という利点がある（図１）。

しかし首長墳の発掘調査例はきわめて少なく，首長系譜の変遷をたどることは困難である。これまで採集された埴輪と前方後円墳の墳形の検討成果などを手がかりにして，首長系譜の変遷を推測すると図２のようになる。細かな説明は省略してその特徴を要約しておこう。

１）まだ未確定だが前方後円墳の出現は１・２期にさかのぼる可能性が高い。たとえば，大淀川下流・一ツ瀬川下流・大隅の肝属川下流に箸墓類型の墳形に近似する前方後円墳が出現し（生目１号，西都原91・100 号，塚崎16 号），それに継続して西殿塚類型の墳形に近い前方後円墳もある（生目 14 号，西都原１号）。これらの首長系譜は後続すると予想される３・４期の前方後円墳を含んでいるから，１・２期にさかのぼる前方後円墳が築造された可能性は十分にある。この段階の分布域は限られるが，３・４期に首長系譜が継続する主要地域に認められる。生目１号墳（約 130 m）を箸墓古墳の 1/2 規模の相似墳とみて間違いなければ，他の箸墓類型の前方後円墳とのあいだに著しい墳丘格差が生じていることになる。

２）各地域での本格的な前方後円墳の築造は３・４期に認められ，ほとんどの地域に首長系譜が形成される。日向の小丸川，大淀川下流域で複数系譜が並立するほか，一ツ瀬川下流域では 10 を超える首長系譜が並び立つ。３期最大規模の生目３号墳（143 m）は前方部幅に違いがあるが渋谷向山古墳の 1/2 規模の相似墳である。

この地域でとくに注意されるのは，３期末から４期末ないし５期初めまでのあいだ，ほとんどの前方後円墳は前方部の平面形が狭長で高さが低平な柄鏡形類型を採用することである。この墳形に

は大型墳が多く 100 mを上回るものが５基知られているが，最大規模の古墳は五ヶ瀬川下流域の菅原神社古墳と肝属川下流域の唐仁大塚の２基が墳長約 140 mである（図３）。

３）５期初頭前後に柄鏡形類型前方後円墳の築造が衰退するのと軌を一にして，以前から継続した首長系譜での新たな首長墳築造が途絶え，首長系譜は１地域１系譜程度までに減少する。一ツ瀬川下流では女狭穂塚（176 m）・男狭穂塚（約 160 m）の１系譜に統合されるほか，女狭穂塚の墳形・規模を基準にした前方後円墳が登場する。異例とも言える長期継続型の持田・川 南古墳群ではこの期を境に前方後円墳が著しく規模を縮小するか，首長墳が一時的に帆立貝形古墳に変化する。一方，本 庄古墳群では一時的に墳丘規模が拡大する（生目古墳群の衰退に連動するか）。

５期～８期までのあいだの首長系譜は消長が著しい。西都原では男狭穂塚の後，７期末ないし８期初頭の松本塚まで明確な首長墳を欠く。一方，先行系譜がみられなかった隣接の石崎川流域に新系譜が出現するが８期以降に継続しない。大隅では７期になって突如墳長 140 mに達する横瀬大塚（大山古墳の 1/4 相似墳）が出現するが，後続する首長墳はない。

４）８・９期には，前段階に一時期首長系譜が断絶した一ツ瀬川・大淀川下流に比較的規模の大きい前方後円墳を築造する首長系譜が出現する（祇園原・下北方など）。祇園原では複数系列階層型の構成をとる。また先行する系譜がなかった清武川流域にも中小規模が出現する。大隅ではこの段階以降の明確な首長墳は知られていない。

５）10 期には前段階から継続する首長系譜に加えて，石船古墳群など中小規模の前方後円墳からなる系譜が加わり，大淀川下流の蓮ヶ池横穴墓群では大型横穴墓に前方後円墳が採用される。一方，下北方では 10 期の始まり頃に前方後円墳の築造が終えている可能性がある。遅くとも TK43 ないし TK209 型式期を前後して前方後円墳の築造が停止するらしい。以後，わずかな首長系譜で大型円・方墳が築造されるが，７世紀中葉前後をもってそれらも築造を停止し首長系譜の造営を終える。

以上を整理すると，①１・２期における前方後円墳の出現，②３・４期における首長系譜の増加，③５期初頭前後における先行系譜断絶と系譜の限定化，④８・９期にかけての中小前方後円墳と首長系譜の増加，⑤ 10 期後半 TK43 型式期を前後する前方後円墳築造の停止と７世紀中葉前後の大型円・方墳化した首長墳の築造停止，の５段階の特徴的な築造過程を認めることができる。

和田晴吾氏は古墳の築造開始から終焉に至る過程を６つの画期と５段階を設定しているが，上述の①～⑤の段階は，その第１段階から第５段階までとほぼ等しい内容を示している（和田 1995，1998）。また首長系譜の断絶や継続，盟主的首長墳の移動などの現象に焦点を当てると，５期初頭前後に顕著な伝統的首長系譜の断絶，８・９期における首長系譜の増加などの現象は都出比呂志氏が指摘する第２期，第３・４期の変動にほぼ対応するものであろう（都出 1988，1999）。

２．盟主的首長墳から広域首長連合を考える

（１）日向灘・志布志湾沿岸域／日向・大隅

日向 165 基・大隅の 12 基の前方後円墳がある。そのうち墳長 100 mを上回る古墳は 13 基，さらに７基が 140 mないしそれ以上の規模である。いずれも未調査に近い状況で内容の判明している古墳は少ないが，採集された埴輪や墳形などから推測された編年的位置は既述のとおりである。

このような突出した大型墳をどう理解するか，かつて私は後述する「豊」地方の大型墳に関する論説に導かれて，これらを盟主的首長墓（以下，広域盟主墳という[1]）と呼び，日向と大隅にわたる広域の地域首長を束ねる盟主的首長の存在と想定して，そうした広域盟主墳を輩出する母胎としての地域首長層結集体を日向首長連合と呼んだ（柳沢 1995）。

その際広域盟主墳として取り上げたのは，生目１号墳・生目３号・生目 22 号・唐仁大塚・女狭穂塚・男狭穂塚の６基であった。その後の検討によって生目 22 号を菅原神社に変更し，新たに大隅の横瀬大塚と日向の松本塚を追加して，１～２期から７期末ないし８期初頭まで継続する８基を広域盟主墳と想定している（図４）。このうち，柄鏡形類型段階の菅原神社・唐仁大塚の２基が同時期第２位の大型墳との墳丘格差がやや縮小しているが，この２基を除いていずれの場合も同時期首長墳と比べてその格差はきわめて著しい。

表1　九州各地における盟主的首長墳の変遷

	筑紫		肥後			豊		日向	
	肥前	筑後	北部	阿蘇	南部	豊前	豊後	日向	大隅
1期						石塚山120		生目1号130	
2期									
3期		法正寺104			向野田85		小熊山120	生目3号143	
4期	銚子塚 98	黒崎観世音 96			スリバチ山98 天神山110		亀塚118	菅原神社140	
5期	船塚114		岩原双子塚102	長目塚111				女狭穂塚176	唐仁大塚140
6期		石人山120			松橋大塚90	御所山118		男狭穂塚160	
7期		石櫃山115				真玉大塚100		松本塚104	横瀬大塚140
8期									

先に地域性の強い地下式横穴墓の分布が日向・大隅に広がると述べたが，前方後円墳を築造しえなかったより下位の首長の墓制の共通性は，より上位の首長間の政治的なまとまりを予測させるに十分であろう。

（2）周防灘・別府湾沿岸域／豊前・豊後

豊前40基，豊後38基の前方後円（方）墳うち，墳長120 m前後の大型墳は4基。この地方の広域盟主墳の抽出と変遷はすでに清水宗昭氏・田中祐介氏によって詳細に検討されている（清水1993，田中 1995)。田中氏は地域首長墳の変遷のなかでの墳丘規模の分析のもとに広域盟主墳の特質を設定しており説得力がある。しかし7期後半の豊前南部の真玉大塚（またまおおつか）は二重の周堀をめぐらし，同時期の首長墳として突出した規模をもつことが判明しており，広域首長墳として追加できるであろう。

この地方の広域盟主墳は，1期に箸墓類型の石塚山（いしづかやま）（1期，120 m），3期に行燈山類型の小熊（こぐま）山（120 m），4期末～5期初に左紀陵山類型の前方部を長くした亀塚（約 120 m），そして7期初に磐田御廟山類型の御所山（ごしょうやま）（118 m），7期後半の真玉大塚（約 100 m）へと変遷する（図5）。これ以降，この地方の首長墳は小型化が著しい。

（3）九州北部／筑前

筑前には186基の前方後円（方）墳が確認されており，九州の旧国単位で最多分布域である。最新の地域研究を参考にすると，西端の糸島平野から遠賀川流域に至る範囲は4地域に区分され，22の首長系譜が想定されている（重藤輝行 1998)。遠賀川中流域を除いて，各地域とも1・2期から首長系譜が出現する。かつての伊都・奴国の領域であった糸島・福岡平野地域は，1・2期段階から5～6系列が並立するが突出した大型墳は認められない。その後も70～90 m程度の地域首長墳は各時期に認められるが，広域盟主墳の候補になるような地域を超えて突出する大型墳はわずかに3期の一貴山銚子塚（103 m）をあげうるにすぎない。対外交渉の拠点として早くから王権による地域編成がすすめられたことを示すのであろうか。

（3）有明海北部／肥前・筑後

筑紫平野西部を占める肥前南部には42基の前方後円（方）墳が知られている。

この地域の首長墳間の墳丘規模にみられる格差について蒲原宏行氏が丁寧に分析し，地域単位の盟主墳（氏の氏族首長墓）の動向，および複数の地域首長墳を統合する旧国単位の盟主的首長墓（氏の部族首長墓）を抽出している（蒲原 1995)。それによれば，広域首長墳の資格となる古墳は，4期の銚子塚（98 m）と，5期の船塚古墳（114 m）の2基が該当するにすぎないという（古墳の築

造時期は柳沢による)。船塚はくびれ部に造出しを設け，盾形周堀をめぐらして，その外方に複数の陪冢が取り巻き，蒲原氏は奈良県新木山古墳の相似墳を想定している。

一方，筑紫平野東部から南部にかけての筑後は 47 基の前方後円（方）墳が知られている。最新の地域研究成果（重藤 1998）によりながら，広域盟主墳の候補を検索すると，3期の法正寺（104 m，行燈山類型に近似する墳形と鍵穴形周堀からの推測）の後，4期末の黒崎観世音（96 m），6期の石人山，(120 m)，7期の石櫃山（110 m）などの 100 m前後以上の大型墳が抽出される。7期の筑後に墳長 96 mの月ノ岡古墳が登場し石櫃山との格差が縮小するが，他の古墳の場合，同時期の第2位古墳との墳丘格差は顕著である（図7）。

肥前と筑後の旧国別では大型墳の築造は間断的だが，筑紫平野全域でみると両地域のあいだで相互に補完しながら継続的にたどることができる。こうした旧国範囲を超えた広域盟主墳のあり方は東九州の豊および南九州の日向と同様な傾向にあり，広大な筑紫平野諸地域の首長墳層間の政治的まとまりをもとに広域首長墳を輩出したと思われる。

（4）有明海・不知火海東岸域／肥後

肥後の前方後円墳は 65 基。菊池川・白川・緑川・球磨川の河川沿いに発達した沖積低地を基盤とする首長系譜が形成されているが，菊池川中下流域と緑川下流域の南岸から宇土半島基部に有力な首長墳が認められるほか，白川上流の阿蘇にも単系列の首長系譜がある。

最新の地域研究成果（高木・蔵富士 1998）によりながら広域首長墳の候補を検索すると，北部の菊池川流域では5期の岩原双子塚（104 m），南部の宇土半島基部に4期のスリバチ山（98 m）と天神山（110 m），そして阿蘇に5期の長目塚（115 m）の計4基をあげることができる。岩原双子塚の後の大型墳として6～7期の松橋大塚がある[2]。墳丘規模が約 90 mとやや縮小しているが，同時期に対比できるような大型墳が知られておらず，最後の盟主的首長墳と想定しうる。このほか，菊池川下流域に墳長 110 mといわれる稲荷山（8期か）があるが，古墳の実体がよく分からずここでは除外しておく。

この地域の首長系譜変遷の特徴は高木・蔵富士氏によって整理されている。それによれば，南部に大型墳が集中する2～4期に北部では中型墳を築造する程度だが，その衰退に伴って北部と中部に大型墳が登場する。6・7期の首長系譜は激減し，ごく限られた地域で前方後円墳が築造されたにすぎないという。広域盟主墳の動向はこの変遷と密接に連動する現象であろう。すなわち，肥後でいち早く大型中朝墳を築造した南部勢力が全域の盟主的地位を数代にわたって襲いたが，4・5期交わり前後の変動期に盟主的地位は北部の岩原双子塚へ移動し，その後ふたたび南部に替わったとみたい（図7）。

しかし，最後の広域盟主墳の松橋大塚と8期末～9期初めに出現する氷川流域の野津古墳群は，その間の時間的間隔がありかつ墓域を大きく移動しているから，築造基盤となった勢力に直接的な系譜関係を認めることには躊躇される。

（6）広域盟主墳の消滅とその後

5世紀後葉（8期）以降，九州の諸地方に広域盟主墳と呼ぶに相応しい大型墳は基本的に姿を認めることができない。9期以降にも筑紫の岩戸山や肥後の中ノ城・大野窟など，墳長 100 mないしそれ以上の大型墳が築造されるが，後述するように7期末～8期初頭までの広域首長墳とは性格を異にするものであろう。これと連動するように8期から9期にかけて，各地の地域研究が指摘しているように中小前方後円墳からなる首長系譜が急激に増加するのも重要である。

8・9期における首長系譜にはいくつかの類型がある。①5～7期から継続する場合（豊前京都，筑前津屋崎，筑後八女・久留米，日向の長期型古墳群），②5～7期で系譜が途絶えた地域に再登場する場合（日向一ツ瀬川下流，日向大淀川下流，豊前宇佐，筑前糸島～早良・福岡～糟屋，肥後菊池川中・下流域，肥後宇土半島基部など），③帆立貝形・大型円墳から前方後円墳に転換する場合（肥前藤津），④明確な首長系譜がなかった地域に新たに出現する場合（豊後日田，肥前鳥栖，肥前壱岐）などである。

このなかでも②のケースが多いのは，都出氏の言う第2期の変動で首長系譜が断絶もしくは衰退

した地域が多かったことを示している。同時に④のように明確な先行の首長系譜が認められなかった地域で新たな系譜が一斉に出現するのも特徴的である。地域ごとに細かな検討が必要だが，②・③のケースが８期に，④のケースは９期に多く出現する傾向を示すようである。

（７）九州における広域首長連合

以上のように，これまで広域首長墳の存在が主張されていた豊・日向以外の筑紫と肥後でも，旧国ないし旧国を超える範囲を輩出基盤と想定される広域首長墳が一定期間継続することが確認された。広域盟主墳の出現時期は地方によって遅速があるが，衰退ないし消滅時期は７期～８紀初頭に限定される見通しをえた。以下，気が付いたいくつかの点をまとめておきたい。

墳丘規模　地方によって広域盟主墳の規模に多少の違いがあるけれども，いずれも 100 m前後以上の規模をもつ。豊と肥前を対象とした詳細な地域研究では広域首長墳と同時期の築造と推測される首長墳の墳丘規模との比較が逐一検討されており，他の地方でも同様な検討が必要であろう（田中 1995，蒲原 1995）。それはともかく，豊と日向では最後の広域盟主墳とした真玉大塚と松本塚が先行盟主墳よりも幾分小型化することを除くと，前者が墳長 120 m，後者が墳長 140 m以上で推移することは地方ごとに一定の格差が設定されていたことを示唆するのかもしれない。

墳形　広域盟主墳は大王墳の相似墳を採用する場合が少なくない。当然のことだが同類型の墳形を採用したり，同類型・同規模墳の例も予想される。前者の例として，日向/女狭穂塚・筑紫/船塚・肥後/岩原双子塚は仲津山類型，女狭穂塚が 3/5，船塚・岩原双子塚は 2/5 規模の同墳形・同規模墳の可能性がある。また豊/亀塚・肥後/天神山は同墳形・同規模墳の可能性もある。この両者の墳形は佐紀陵山類型に近似するが前方部が１区画長いようである（図４）。

そして中期においては他の首長墳とのあいだで墳丘格差だけでなく，くびれ部の造出・盾形周堀・陪冢配置などの古墳構成要素で顕著な差異を演出している。

顕著な移動　いずれの地方でも広域盟主墳が単系列の首長系譜や一地域に長期にわたって継続することはなく，地域間あるいは旧国を超えて移動するケースが多い。肥後のように南部→北部→南部という移動は少ないほうである。

広域盟主墳の移動は直接の輩出基盤勢力となる有力地域首長勢力や，いくつかの地域首長連合勢力が入れ替わることことによって生じたと予想される。その要因として地方内覇権をめぐる争いも予想されるが，すでに指摘されているように，各地域の首長系譜の変動が王権をめぐる政治的な激動や，新しい地域支配システムへの転換など，畿内政権の政治的動向と密接に連動することが多かったのではないかと推測される（都出 1988・1994，和田 1999）。

広域首長連合というと一枚岩のような強い政治的規制力をもつ政治秩序をイメージしやすいが，首長系譜や広域盟主墳の移動が顕著に認められることからも比較的不安定な政治関係であったのではないか。こうした変動が安定に向かうのは，９期前後から各地方に安定的な築造が認められる大型首長系譜（日向祇園原・下北方，筑前須多田，豊前京都，筑後八女，肥前鳥栖，肥後野津など）が出現してからのことではないかと思われる。

４．有明首長連合の形成と衰退

５世紀初め，筑紫に広域首長墳の石人山が出現した頃，肥後の広域盟主墳は岩原双子塚から松橋大塚に移動したか，その前段階であったと想定される。その後，筑紫では石櫃山が築造されたのに対して，松橋大塚についで首長墳が築造されたか疑わしい程度に停滞した可能性あるという（高木・蔵富士 1998）。破壊された大型墳がなくこの状況が当時を反映しているとすれば，筑紫勢力に対して肥後勢力の劣性は明白で，一時的に筑紫勢力が肥後を含めた有明海沿岸域を代表する地位を襲った可能性も視野に入れておく必要があろう。

森貞治郎氏以来，石人山は有明海古墳文化を代表し，その形成端緒となった古墳と評価されている。石人山以降，約半世紀弱のあいだ有明海沿岸域の主要な首長墳の墓制構成要素につよい共通性が認められることは夙に知られてきた（図８）。私はこの共通性を広域首長間の政治的まとまりとみて「有明首長連合」と呼んできた。

石人山古墳には横口式家形石棺[3]と石棺への装飾，そして石製表飾（石人石馬）と総称される石製品（甲冑形）が共伴する。石棺や墓室への装飾は肥後南部の不知火海沿岸地域，石製表飾は筑後南部の大牟田地域で先行して採用されていた儀礼や儀礼用品を取り入れたものだが，首長の遺体を収める横口式家形石棺は首長連合に結集する有力首長専用棺として発案されたと想定している。肥後北部の横口式家形石棺は在地石工集団の製作だが，肥前・筑後の横口式家形石棺はすべて肥後南部勢力のもとで製作され連合を構成する有力首長へ配布されたものであろう（柳沢 1987）。

首長連合の中枢を担った筑紫勢力の墓域は早く森貞治郎氏が指摘したように八女（広川）系譜から久留米東（久留米）系譜へと移動したようにみえるが，古墳の分布状況と築造系列の研究状況からみると，複数系譜からなる連合体であったと理解すべきであろう（柳沢 1989，重藤 1998）。石櫃山を最後に広域盟主墳たる大型墳は途絶え，その後の久留米系譜は帆立貝形で規模が縮小した浦山（80 m），そして大型円墳？の本山を経て消滅してしまう。

かつて私は，この首長連合が岩戸山古墳段階まで継続し磐井の乱後に瓦解したのではないかと漠然に考えていた。しかし横口式家形石棺を首長連合を構成する有力首長層の棺制とすれば，8期末ないし9期初頭の北部清原古墳群の塚坊主古墳（江田船山の次代首長墳）や南部野津古墳群の物見櫓古墳における複室構造横穴式石室採用や，久留米・八女の首長墳小型化などからみて，8期半過ぎには衰退した可能性が高い。後述するように，大王・周辺有力首長の棺制となった中肥後型石棺の製作と輸送を押さえて勃興した野津勢力の登場，そして野津勢力を軸にした肥後の新たな政治秩序の再編が，旧来の広域首長連合を解体に追いやったと推測される。

以上を要約すると，有明首長連合は肥後勢力の衰退に乗じて筑紫勢力が筑肥二地方の盟主的地位を襲った。独自の棺制を採用し，あるいは石製表飾を墳丘上に樹立するような独自の墓制を確立して結集する首長間の同盟関係を確認した。しかしその期間は短く，九州各地での広域の政治的まとまり（各地首長連合）が解体するのとほぼ軌を一にして衰退した。その基本的な性格は，従来の枠組を超えた広域の政治的まとまり（首長連合）の一類型といえるであろう。

有明首長連合の消滅から約半世紀後に起こった筑紫君磐井の乱の出来事が「記紀」「筑後国風土記」に採録された。八女台地上に墳長 138 mの巨大な墳丘，膨大な多種多量の石製表飾を立て並べた岩戸山古墳の被葬者が磐井であることはほぼ間違いないであろう。岩戸山の位置からみても，磐井は広川系譜を出自とした可能性が高い。磐井がどのような事情でこれほど巨大な古墳を築造できる権力をどのように獲得したのか分からない。しかし岩戸山古墳に樹立された各種の石製品と，その後の地域的広がりをみると，石人山古墳築造にあたって有明海沿岸域各地の石工集団が関与したことが想定されるのと同様に，広域から造墓集団が関与したとみてよいであろう。

5．有明首長連合諸勢力と各地首長との交渉

古墳資料で特定の地域間ないし首長間の交渉を解明するために，特異な墳形，埋葬施設，埴輪，須恵器などを手がかりに進められている。この地方の場合，特異に発達した刳抜式石棺と横穴式石室が有効だが，刳抜式石棺は製作地や製作年代に関する研究は重要な成果をあげている。とくに阿蘇溶結凝灰岩を素材とした舟形石棺（北肥後型・南肥後型）と，阿蘇ピンク石を素材とした中肥後型石棺は輸送先が広域にわたり，それぞれの製作地首長と搬入地首長との直接的な交渉を推測できる特性をもつ。

いま一つの横穴式石室は，5世紀後葉以前において継続的に横穴式石室を築造しているのは九州北部と有明海沿岸域にすぎず，東海地方以西の西日本各地に点的に分布する横穴式石室は九州からの造墓集団派遣によって築造された。そのなかでも筑肥型ａ類とｂ類の横穴式石室（以下，筑肥Ａ型・筑肥Ｂ型と名称を変更する）は，筑紫勢力の発案のもとに肥後の造墓集団との協同によって成立した特殊型である（柳沢 1990）。

西日本諸地域への阿蘇石製石棺と筑肥Ａ・Ｂ型横穴式石室の分布状況と想定される石棺輸送ルートと，石棺搬出・横穴式石室築造時期は図９・10 のとおりである。これによると，南・北・中肥後型の刳抜式石棺が盛んに輸送された時期が，それぞれの製作地の首長系譜が隆盛する時期とほぼ

一致し，さらに各型式の輸送先や採用古墳に顕著な違いが認められる。近年，継体大王の真陵と推測される今城塚(いましろづか)から中肥後型石棺が発見されたことは，大王・有力首長間の棺制の推移を考えるうえできわめて重要な出来事であった。

詳細はこの分野の研究を開り拓いた高木恭二氏の論説に譲るが（高木 1983，1993），７・８期の北肥後型石棺の大王墳陪冢への採用は，江田船山出土の鉄刀銘文から推測される菊池川下流域首長子弟の雄略大王身辺への出仕という事実をより鮮明に浮かび上がらせる。ここで注意されるのは，９期を境に畿内へ輸送される石棺が北肥後型から中肥後型へ転換する事実である。９期以降大型墳を継続的に築造するに至った肥後南部勢力は，北部勢力に取って代わって大王・有力首長の棺制となった中肥後型石棺製作にあたり，一定の地位を確保したことを示すのであろう。

また筑紫勢力が主導したとみられる筑肥Ａ・Ｂ型横穴式石室は，吉備の大首長のほか，若狭・志摩，さらに百舌鳥古墳群外域を構成する首長墳などに採用され，より広域の交渉を示している。また有明海沿岸域の有力首長墳（肥前丸山，肥後銭亀塚）や豊前の広域盟主墳である御所山古墳にも採用されていることは興味深い。

以上のように，筑紫そして肥後の北部と南部の三勢力は独自的に，あるいは一部共同して（吉備大首長の造山には肥後南部の石棺が，その陪冢の千足古墳古墳には筑肥型Ｂ型石室が採用されている），各地の地域首長や王権・周辺有力首長との関係を通じて勢力の伸張を計ったのであろう。

【注】

（注１）この用語は次の文献の提案を受けた。田中祐介 1995

（注２）調査担当の宮崎敬士氏から墳丘規模・出土埴輪について多々ご教示を頂いた。埴輪の時期決定が困難なので，６～７期と幅をおいた。

（注３）横口式家形石棺は組合式石棺の短壁に開口部を設けた構造で，北部九州に成立した横穴式石室のアイディアを箱形石棺に取り込み，かつ筑後南部から肥後に盛行していた舟形石棺の屋根形蓋を組み合わる。筑紫では棺を覆うように横穴式石室を構築するが，肥後では墳丘内に直接埋置するのが普通である。

【参考文献】

蒲原宏行 1995「肥前（壱岐・対馬）」『九州における古墳時代首長墓の動向』（九州考古学会・宮崎考古学会合同学会）

清水宗昭 1993「豊地方における古墳時代前・中期首長層の動向」『古文化談叢』第 30 集（中）pp.669-718

重藤輝行 1998「古墳時代中期における北部九州の首長と社会－福岡県を中心として－」『中期古墳の展開と変革－５世紀における政治的社会的変革の具体相（１）』（第 44 回埋蔵文化財研究会発表要旨）

高木恭二 1983「石棺輸送論」『九州考古学』58，pp.42-54

高木恭二 1993「石棺の移動は何を物語るか」『新視点　日本の歴史』２，古代篇１（新人物往来社）

田中裕介 1995「古墳時代首長墓の動向－豊前－」『九州における古墳時代首長墓の動向』（九州考古学会・宮崎考古学会　合同学会）

高木恭二・蔵富士寛 1998「肥後における古墳文化の特性－筑後八女古墳群との比較－」，『八女古墳群の再検討』（第１回九州前方後円墳研究会発表要旨）

都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第 22 号史学篇，pp.1-16

都出比呂志 1999「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』（大阪大学文学部）

柳沢一男 1987「共通の墓制が環有明海連合政権の存在を証す」『歴史読本』86-3，pp.228-235

柳沢一男 1989「福岡県の円墳」『古代学研究』第 123 号，pp.37-43

柳沢一男 1990「横穴式石室からみた地域間動向－近畿と九州－」『横穴式石室を考える』（帝塚山大学考古学研究所）

柳沢一男 1995 a「日向・筑紫－古墳時代最大の内戦の地」『古墳はなぜつくられたのか』（朝日百科　歴史を読みなおす２，朝日新聞社）

柳沢一男 1995 b「岩戸山古墳と磐井の乱」『継体王朝の謎【うばわれた王権】』（河出書房新社）

渡辺一徳・高木恭二 1989「古墳時代石棺材としての阿蘇溶結凝灰岩」『熊本大学教育学部紀要』第 38 号，自然科学，pp29-38

和田晴吾 1995「古墳築造の諸段階と政治的階層構成－五世紀代の首長制的体制に触れつつ－」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流５，（名著出版）

和田晴吾 1998「古墳時代は国家段階か」『権力と国家と戦争』古代史の論点４，（小学館）

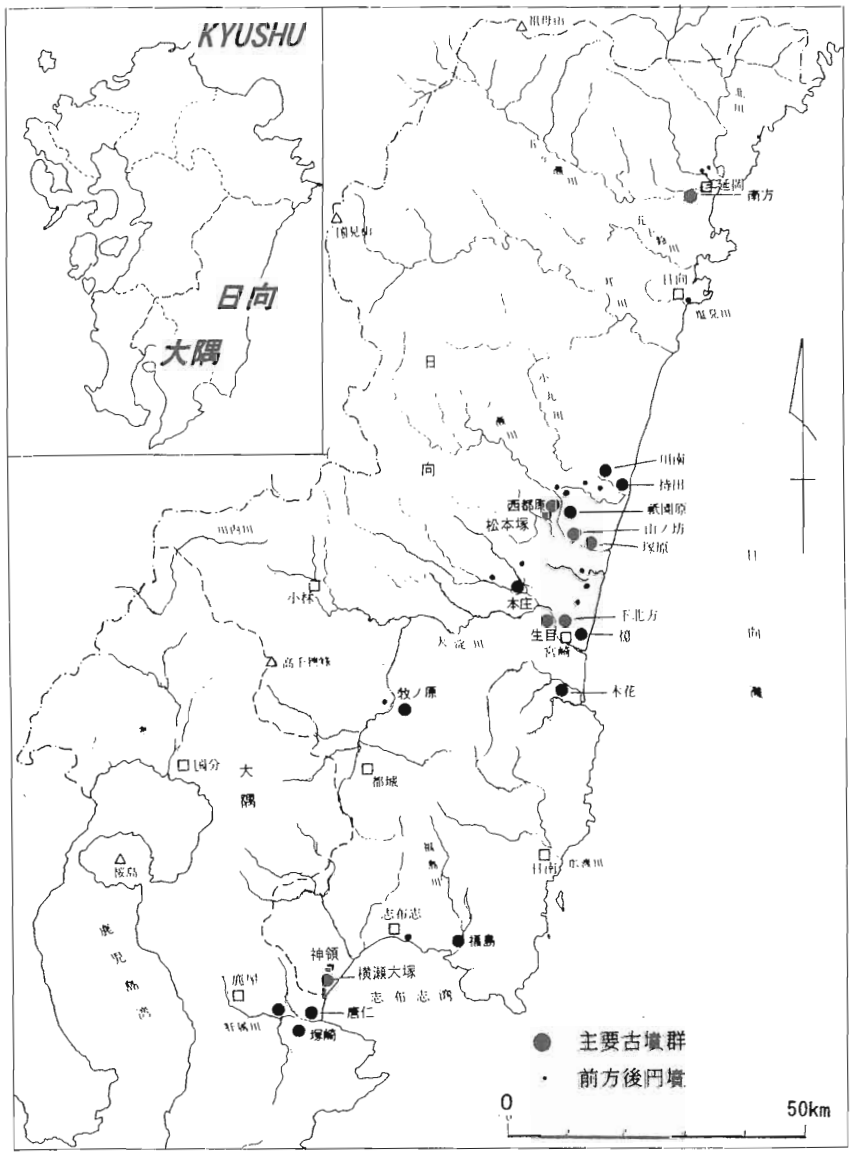


図1. 日向・大隅の主要古墳分布図

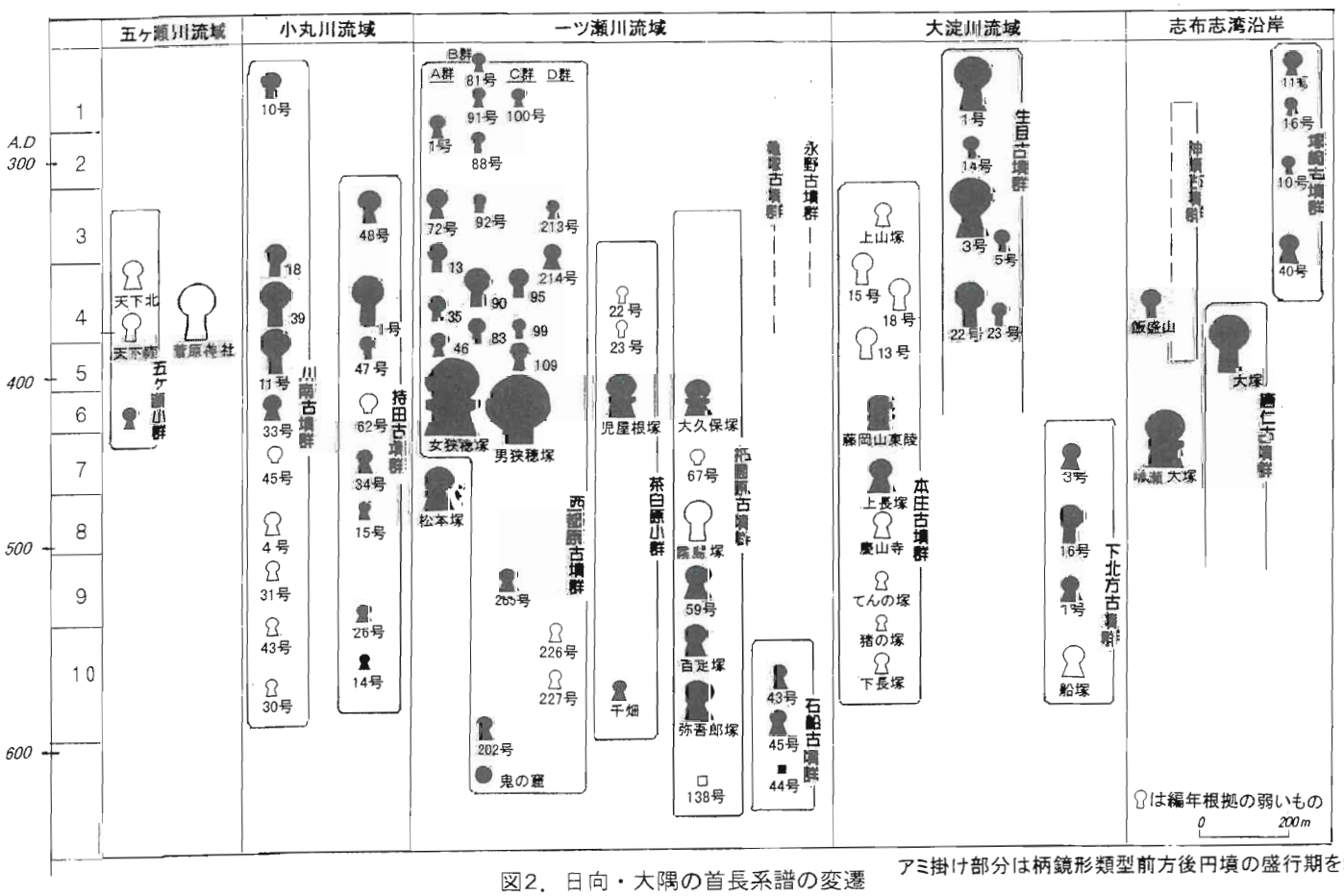


図2. 日向・大隅の首長系譜の変遷

アミ掛け部分は柄鏡形類型前方後円墳の盛行期を示す。

南九州における柄鏡形類形墳丘の前方後円墳とその分布

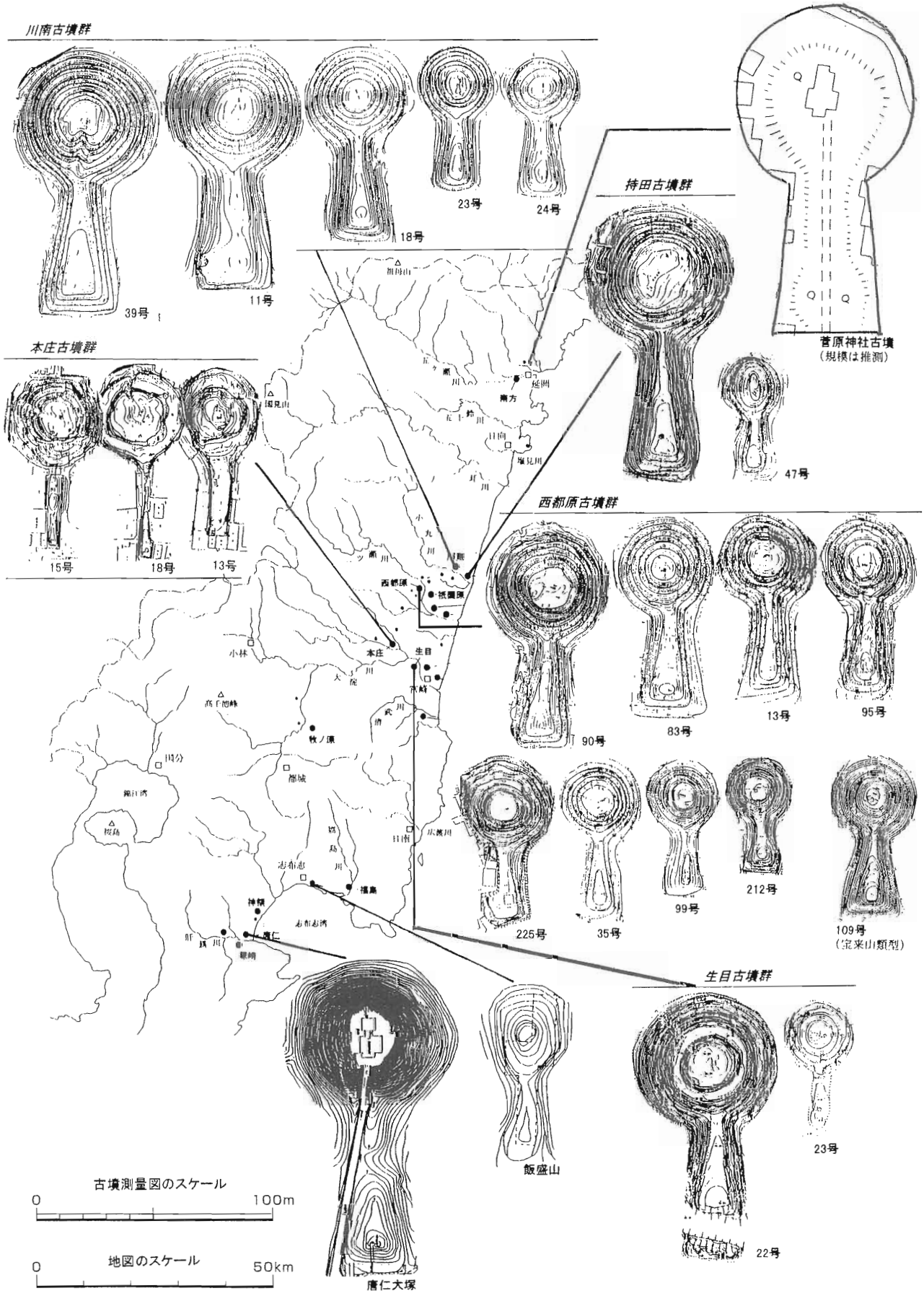


図3．日向・大隅に分布する柄鏡形類型の前方後円墳

前方後円墳墳丘測量図はすべて，宮崎県 1997『宮崎県前方後円墳集成』からの引用である。

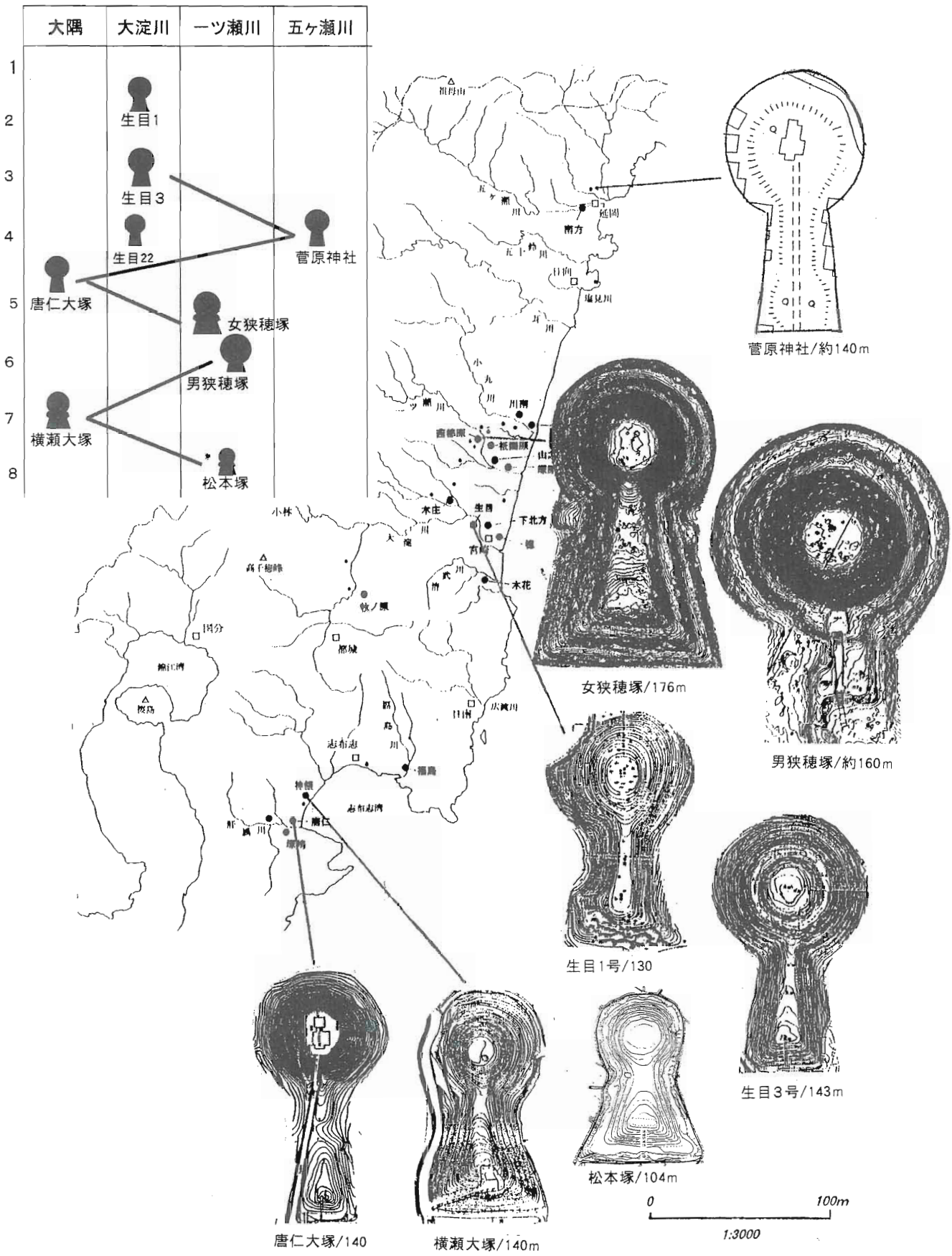


図4．日向・大隅の広域盟主墳

宮崎県内の前方後円墳墳丘測量図は女狭穂塚・男狭穂塚を除いて宮崎県 1997『宮崎県前方後円墳集成』による。
女狭穂塚・男狭穂塚は宮崎県教育委員会 1999『男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量調査報告書』による。
鹿児島県の前方後円墳測量図は近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』九州編による。

図5．豊地方の広域盟主墳分布図（清水1993を一部改変）

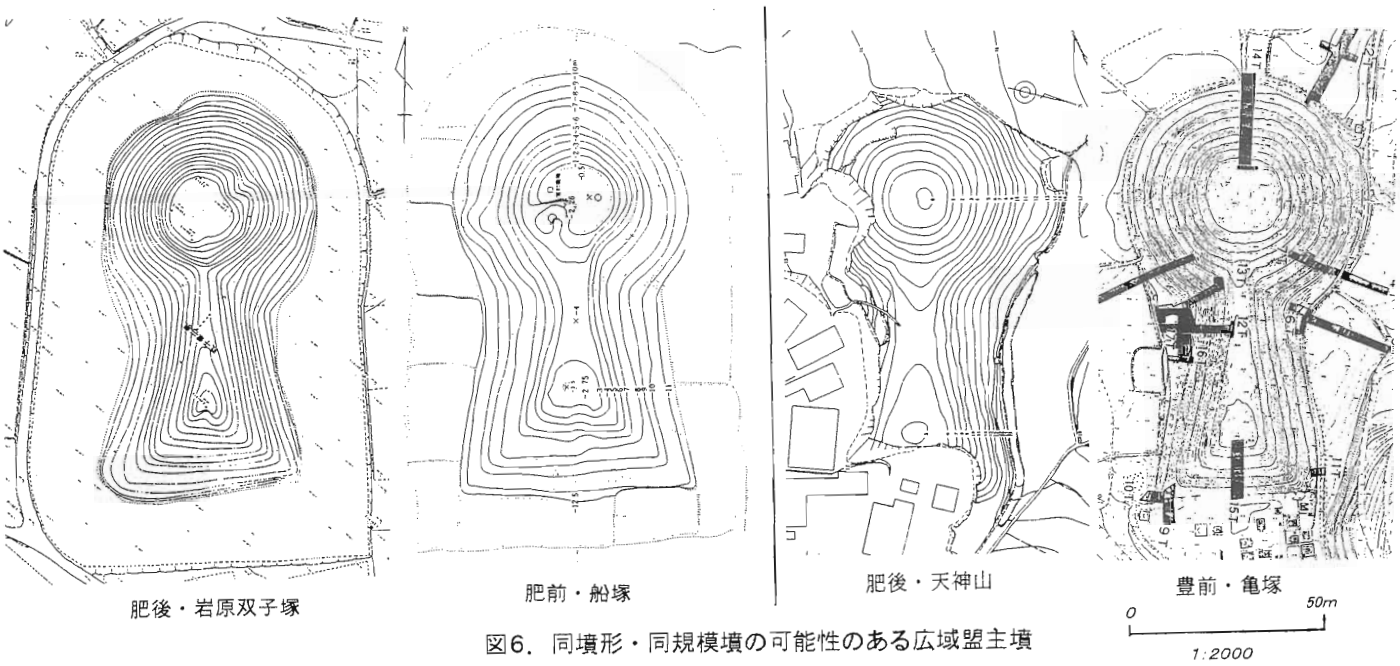


図6．同墳形・同規模墳の可能性のある広域盟主墳

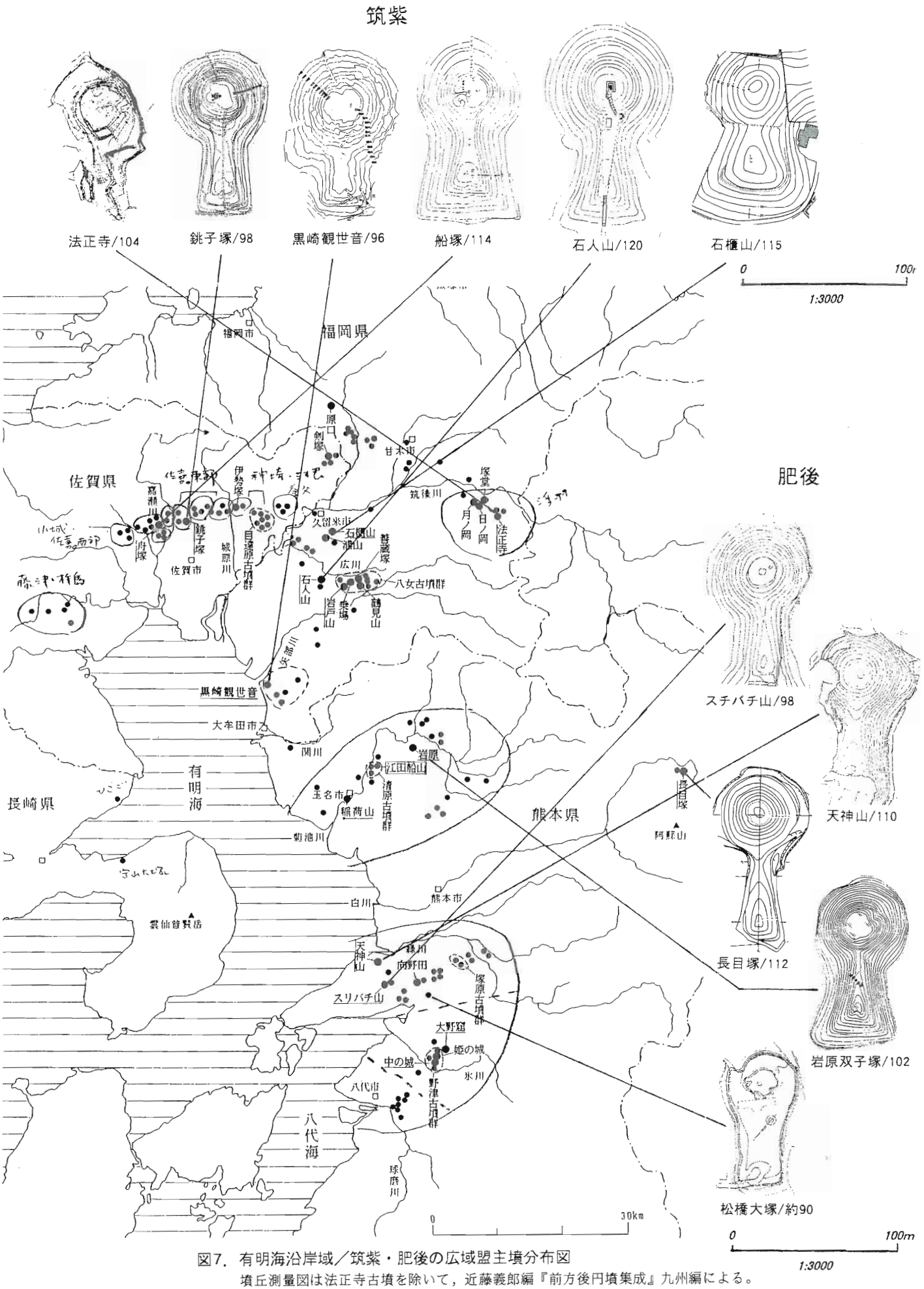
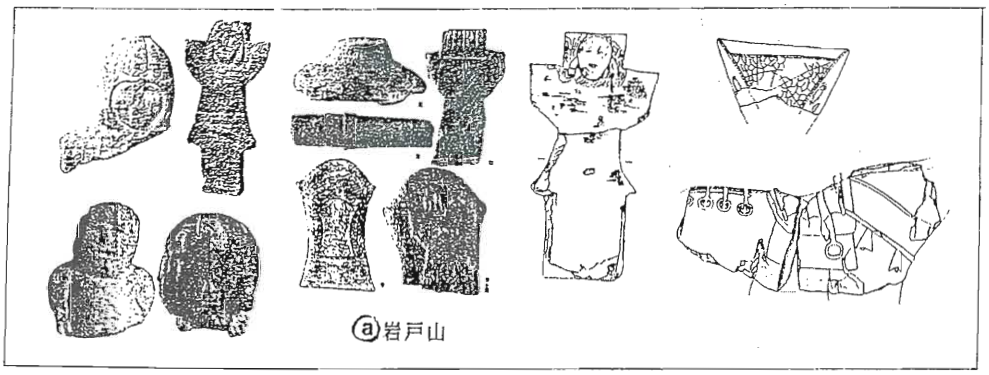


図7．有明海沿岸域／筑紫・肥後の広域盟主墳分布図

墳丘測量図は法正寺古墳を除いて，近藤義郎編『前方後円墳集成』九州編による。
法正寺古墳は浮羽町教育委員会 1993『朝田古墳群概報』による。

横口式家形石棺と石人石馬の分布



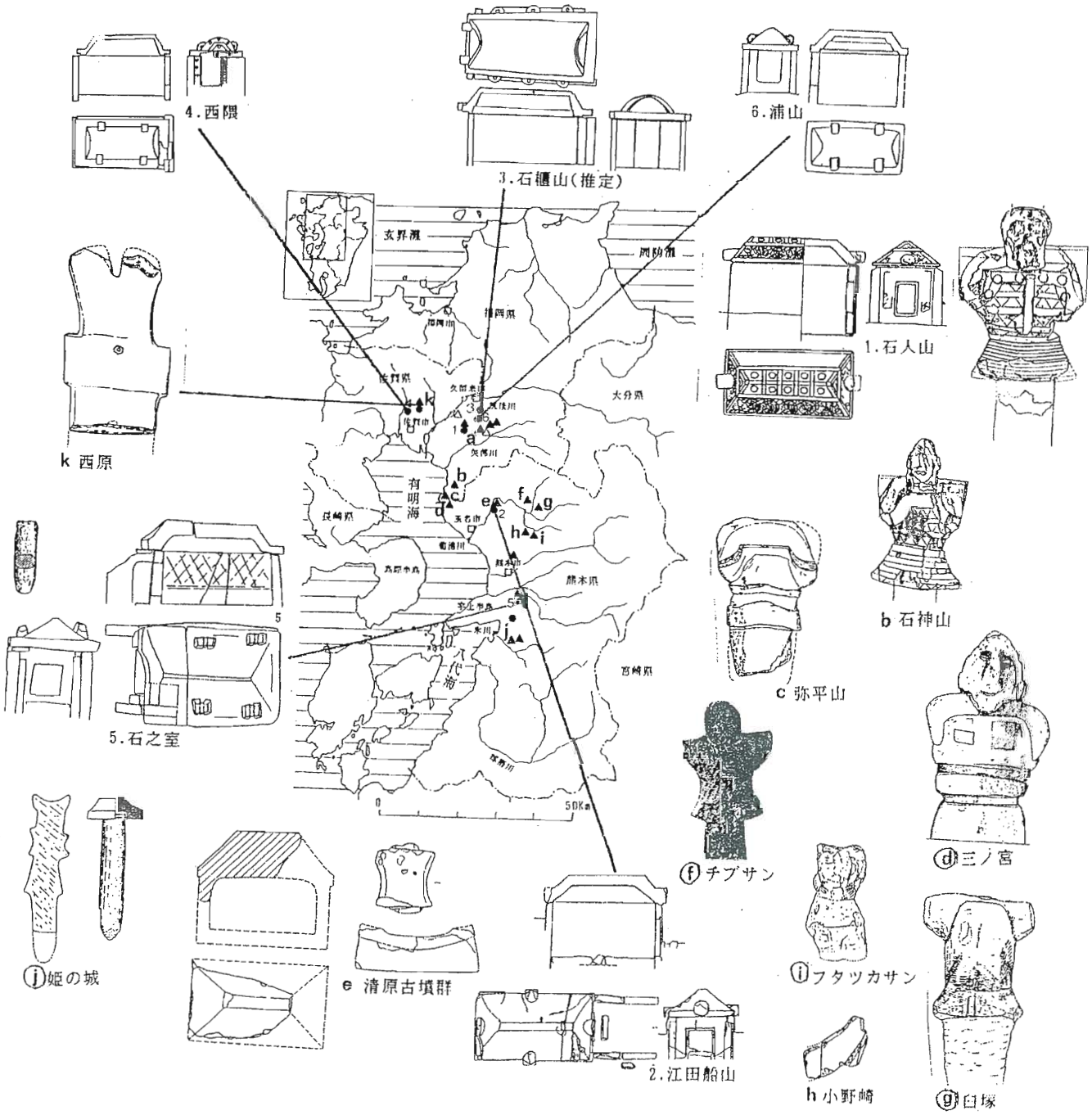


図8. 有明海沿岸域の横口式家形石棺と石製表飾

	伊予	讃岐	備中	備前	播磨	摂津	河内・和泉	大和	山城	近江	紀伊	若狭	志摩	主な変遷
3期									茶臼山○					南肥後型
4期					中島○									
5期														
6期		丸山● 青塚●	千足▲											北肥後型
7期	蓮華寺●		造山□				塔塚◎ 唐櫃山●					向山1▲	おじょか▲	筑肥型石室 横口式家形
8期				築山■ 小山●			長持山●■ 峰ヶ塚■				大谷□			
9期						今城塚■		野神■ ミロク■ 慶雲寺■ 鑵子塚■ 東乗鞍■ 兜塚■		丸山■ 甲塚■				中肥後型

図9．九州から輸送された石棺と工人派遣によって築造された筑肥A型横穴式石室（高木・蔵富士1998を一部改変）

●北肥後型石棺　■中肥後型石棺　○南肥後型石棺　□南肥後製作特殊棺　▲筑肥A・B型横穴式石室

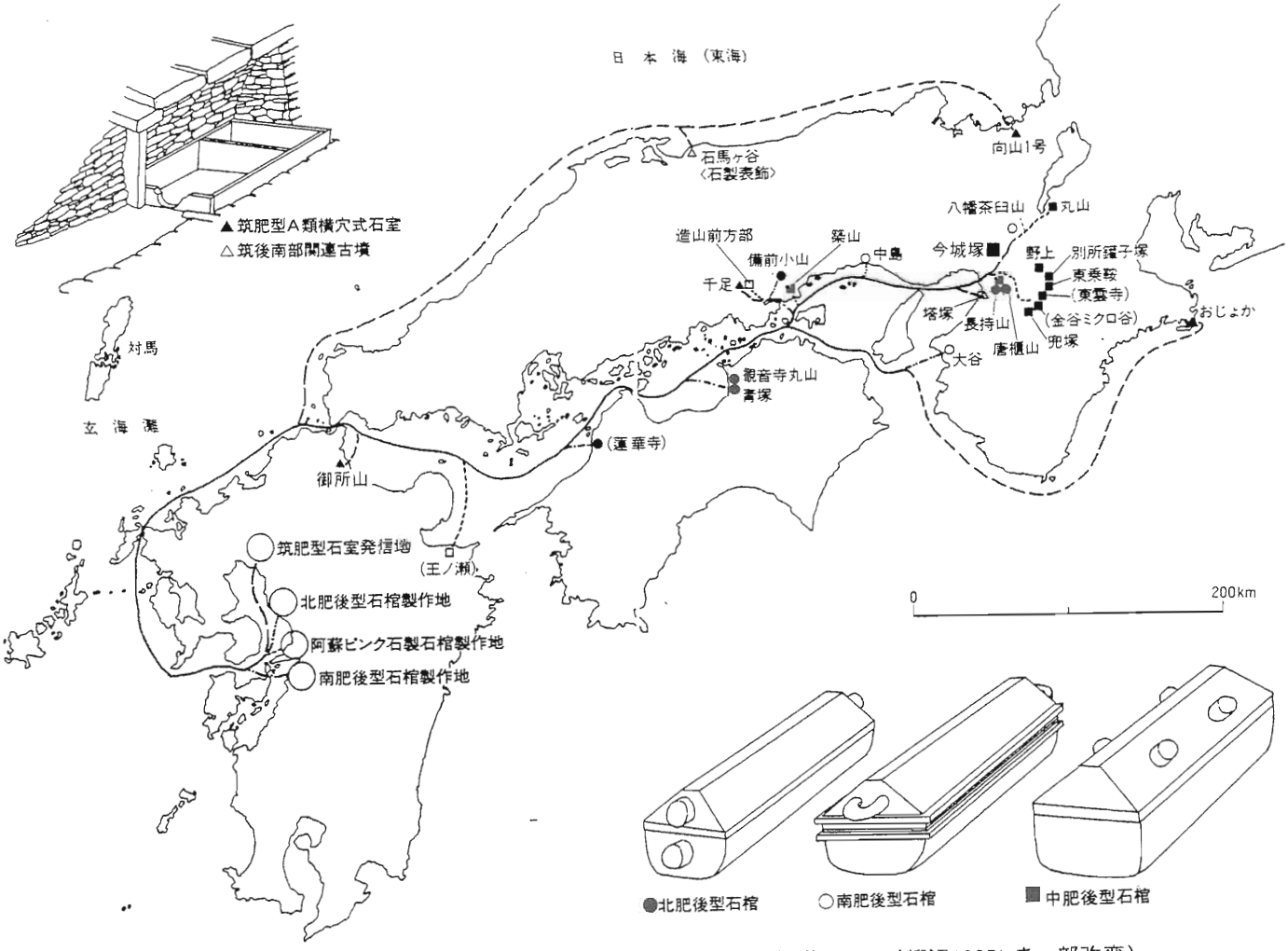


図10．石棺・石室の分布と想定される輸送ルート（柳沢1995bを一部改変）